

シェアとはアソシエーションの一形態、資本主義のどん詰まりに現れた小さな希望の灯

～以下、「希望は貧乏 ルソーの思想を手がかりに」＜朝日新聞（2013年1月1日）＞より～

注：・・・・・・は中略部分。〔 〕は補足部分。文中の青太字は引用者が強調のためにそうしました。

ひとつ屋根の下、飛躍もシェア

・・・・・・[シェアハウスの]「渋家（しぶハウス）」は、・・・・・・半年たつと色んな人間が住み着いていた。・・・・・・家賃と光熱費は全員が平等に負担した。・・・・・・刺激を受け、与え、仕事や知人を紹介しあう。・・・・・・貧乏から始まったシェアという生きる流儀に、希望の萌芽（ぼうが）が出ている。「若い人にとって今、シェアハウスと一人暮らしは同じぐらい現実的な選択肢」。そう話す高木新平（25）は大手広告会社博報堂の元社員。退社し、シェアハウス「トーキョーよるヒルズ」を11年6月に始めた。・・・・・・高木は、**シェアの向こうに脱貨幣経済の可能性**も見ている。**交換・贈与というあり方**だ。・・・・・・「テレビ、冷蔵庫、車と、モノを買わせる方向で社会も経済も動いてきた。その頂点が1人1戸のワンルームマンション。シェアは、それと真逆の方向に行っている。貧しいだけじゃない。楽しいから、みんなシェアするんです」・・・・・・。

自立した個人の契約、新たな形

些事（さじ）だが、取材中に気になったのは部屋やトイレ掃除のこと。「何となく。空気を読んで」「イベントをする人間が率先してやる」。明文化したルールはないが、そこには自立した個同士の黙した「契約」があった。

そうした**アソシエーション（自立した個人の自由で対等なネットワーク）**を考察したさきがけは、**18世紀フランスの思想家ルソー**だった。『**社会契約論**』で「**各人は万人に結びつき、にもかかわらず自分自身にしか服従せず、従来同様自由であること**」、**そのための社会契約と団体が最も重要と書いた**。

個人の自由や財産を守るためにこそ契約を結ぶ。ルソーはその団体を「国家」としてとらえたが、**のちにマルクスは国家だけではなく、地域の自治組織や労組、協同組合、同好団体などが分権／重層して存在するべきだというアソシエーション論へと発展させた**。

「国や地域社会や家族だけではない、オルタナティブ（もう一方の）スペースとして考えている」と渋家の住人は語った。**シェアとはアソシエーションの一形態、資本主義のどん詰まりに現れた小さな希望の灯**——と言うのでは楽観的に過ぎるだろうか。